

島根・広島県境の 峠道は交流の道

あかな 赤名トンネル



国境にいざよふ雲や国原に雪も時雨もこぬ深山より 憲吉

アララギ派の歌人中村憲吉、彼が住む布野宿のあたりに降る雪も時雨も、島根との県境にそびえる女亀山に湧く雲がもたらせることだと詠んだ歌です。この女亀山から1 km余り東に寄ったところが国境となる赤名峠です。

藩政時代、赤名峠は石見銀山から銀や銅を尾道や笠岡に運んだ銀の道でしたが、明治になると幕藩体制は崩壊し、関所は廃止されました。明治20(1887)年、広島～松江線(現国道54号)のうち赤名～布野間が開通すると、赤名峠から三次まで炭俵を荷車で運ぶ需要が増えてきました。

作家山代巴の『荷車の歌』の主人公セキさんが結婚したのは明治28年のことです。荷車引きは盛んになっていました。しかし、冬場の積雪が深い間荷車は通れなくなります。そこで石州海岸の塩鯖やワニのあぶり串等を背負って布野まで下り、布野からは干し大根・甘藷などを赤名へ届ける山道3里の仲士をしました。重い荷物を背負い、雪の峠を越えることは、大変な労働であったわけです。

今でも話題になるサンパチ豪雪はその名の通り昭和38(1963)年の記録的な豪雪に見舞われた災害でした。三次からも、また松江への道も寸断され、赤名峠を越えての物資輸送は途絶えてしまいました。山間の村が孤独と不安にさいなまれた出来事でした。この災害を機に、多くの人が村を離れ、中国山地の過疎化に拍車をかけたと言われています。

その翌年の昭和39年9月、峠の直下を貫通する赤名トンネルがようやく完成しました。島根・広島両県により施工された赤名トンネルのおかげで、旧道では4.8 kmあった道のりが真っ直ぐな2.8 kmになりました。

セキさんが冬でもビッシヨリ汗をかきながら、炭俵を背負っておりた峠の下の道を、私たちはあっという間に通り過ぎてしまいます。赤名トンネルが開通して半世紀余り、歴史は繰り返すと言われますが、三次から尾道へ新しい道がつながりました。

■位置図



中村憲吉歌碑と国境碑
国境にいざよふ雲や国原に 雪も時雨もこぬ深山より



赤名峠の旧国道
赤名トンネル開通までの75年間、荷車や馬車、後にはバスも通った。

赤名宿の道標
石見銀山から尾道までの道が合流する場所に、安政3年の道標がある。「左ハ石州大もり」「右ハ松江 大やし」と刻まれている。



赤名トンネル
島根・広島県境付近。壁面にはそれぞれに出雲大社と宮島の大鳥居が描かれている